

令和4年11月1日
市役所7階会議室

1. 宮沢園長挨拶 内藤係長挨拶
2. 有馬部会長より

子どもを取り巻く当面の課題や、放課後デイの利用状況、困難ケースなど基幹センターとしてどの様な働きかけができるか考え、現状を把握していきたい。わかくさ学園の説明をお願いしたい。

宮澤園長（組織図参照）

令和2年4月よりセンター化し現在に至る。定員変更など悔いもあるが、役割を全うするため「児の支援」「親の支援」「地域への支援」を提供している。しかしながらコロナの影響を受け、親子療育などは自粛を余儀なくされた。

児童発達支援は希望も多く、お断りをしている状況であり、そちらのフォローも必要である。地域支援としては親子支援と巡回があげられる。

保育所等訪問は受給者証が必要であり、家族にとってはハードルが高く、年に数回の利用に留まっている。(株)リタリコは積極的に訪問をしている様子。

健康課とは主に、検診でわかくさ学園と連携し、児の状況もほぼ把握が出来る。指導室は学校選びにおいて、また児童発達支援、放課後デイとの連絡会は年2回行っている。

医療的ケア児は3名。看護師が常勤であることと、コーディネーター2名を配置し対応をしている。

子ども家庭庁の創設にあたり、障害のあるお子さんへは対応が遅れがちであり、切れ目ない支援においては不安がある。

堀野：組織図の中に「親の会」を入れて欲しい。また清瀬特別支援学校は現東久留米特別支援学校に変更願いたい。子ども家庭庁の所属は厚生労働省か？

斎藤：現在、協議中と思われるが、いずれにしてもどこかの省に属するはず。

有馬：法律に常に振り回されている感がある。わかくさの職員配置はどうなっているのか？

宮澤：年度毎で配置をしているが保育士10名のうち2名は相談担当。

堀野：市内の相談事業所で、相談件数に偏りがある。親の会でも、相談支援を受けてくれる事業所がない、という課題が出ている。

斎藤：どれもこれも、わかくさが担うのは負担も大きく整理する必要がある。

：リタリコは上場企業で熱心に取り組んでいるが、当然商売の要素が強い。

有馬：民間の事業所が増えていく中、東久留米市として、質の担保をどう考えていくか。放課後デイの質も事業所によって大きく異なる様子。放課後デイ設立の認可は東京都のため、市は「都が認めたから～」という対応。市として指導等ができないか考えて欲しい。

斎藤：当初、放課後デイが急速に増えたが、質の問題や運営困難で撤退する事業所もある。大手は教室のスタイルにして、人材確保をしている。

有馬：保育所等訪問件数が少ないのはなぜか？

宮澤：受給者証をとって契約等、乳児を抱えた母親にはハードルが高いようだ。

斎藤：親には、子の障害を認めたくない思いもあるが、実際は悩んでいる現状。受給者証の取得は決断しにくい。

堀野：親として、障害がいつか治ると思う場面がある。

宮澤：周りからの「大丈夫」という言葉も無責任な場合がある。事業所間でどう連携をしていくか。

小柴：シュプロス、ゆう、かるがも、アイル、てんとうむしとは連携をしている。ハロウィンなどは新しい事業所も含めていきたい。

有馬：相談部会でも来られる事業所が集い、現状を分かち合っている。放課後デイ事業所も同じようなレベルで共有をする必要がある。

斎藤：放課後デイを選ぶ基準はどのようなものであるか。

宮澤：空きがあるか、直接事業所に問い合わせているようだ。

斎藤：わかくさパンフレットの案内やホームページに、よくある質問 Q&A を載せるだけでも基本事項は伝えられ、職員の仕事量削減になる。

堀野：我が家の場合は最初に出会った保健師さんがわかくさにつないでくれた。今でこそネットがあるが、当時は人づてで情報を得た。子どもの相談はできるが、親自身の相談ができる場所がなく不安であった。

斎藤：今回協力を頂いたアンケートも、障害ではなく「気がかりなこと」とした。その方が入りやすい、相談しやすいと思われる。

有馬：親が不安になった時、市やわかくさのホームページを見て、基幹センターに相談、その後サービスにつながっていくことが望ましい。

斎藤：親自身も不安。ホームページに親の声を載せてあげると親切である。ネット情報のように受け入れられやすい。

小柴：ケアマネージャーと相談支援専門員の違いが大きすぎる。東京都の資格取得研修が受講出来にくい状況。相談支援員が増えない。

斎藤：一般相談は市の独自事業で賄うなどはどうか。予算の兼ね合いもあり市は新規事業を敬遠するかも、だが。

堀野：親の会も相談を受け付けてはいるが数は少ない。

斎藤：表のバージョンアップを願いたい。線や枠取りを整理してもらおうと家族に

とって安心材料になる。

斎藤：自立支援協議会が主体で研修会や講演会など実施できないか。事例のほう
が保護者向けには有効と思われる。

小柴：昨今の貧困家庭について、仕事をせざるを得ない。すると生活力が身につ
いていない児がいる。放課後デイで不登校児もあづかっている。学校との連携も
必要。

斎藤：放課後デイはレスパイト利用的になっている。9月の国連で分離教育につ
いて触れている。文科省や保護者はどう感じているのか。

堀野：子供が高等部のころインクルーシブ教育が叫ばれていた。分離の時代から
「みんな一緒に」になったものの再び分離となることは予想できた。また障害の
違いによって一概に「一緒に」なりにくい。

有馬：自身の子は復籍で交流を図ってきた。大きくなってからも互いに存在をし
っている関係が築けている。

斎藤：地域で暮らす、地域で守るということには、小さい時からの関わり、関係
性が重要。幼少期から身近な存在であれば自ずと「知っている存在」になる。

堀野：今でこそ良き理解者であるが、小さいうちは「きょうだい児」の想いもあ
る。

有馬：一例だが、ある児のケース会議で、児について初めて知ることが多く、連
携していれば、特徴を知っていれば違う関りができたと実感した。今後も連携に
ついて話題に挙げていきたい。